

る上でも統一された「かぶき論」を期待している。そのときには仮説が定説となるであらう。

第二部のかぶきの形成は、確実な資料によつて考証されたものであるために、発表後十数年も経過した「並木五瓶の晩年」(十八年八月)なども未だに新鮮で貴重な論文であり、「蘭八節追考」にしても、そ

伊藤康安著『仏教の理論と展開』

岡

一

男

仏教及び仏教史の研究書は、汗牛充棟で、載籍極めて多いが、印度・中国・日本の三国に伝来し、釈迦以来二千五百年の歴史を有し、八万四千の法門及び五千四十八巻の經典を持つ仏教の教理史を叙説したものは、ほとんど稀で、凝然の三国仏教伝来史や八宗綱要のごときを今なお珍重せざるをえない現状である。勿論、専門書としては高楠・木村・宇井・宮本・辻ら諸碩学の大著もあるが、巻帙浩瀚、門外漢には難解難入、亡羊の嘆なきにしもあらずである。また、坊間流布の仏教概論の書は我田引水

の後これ以上の考証は出ていない。これらの一般に入手しがたい研究誌に発表されていた論文を収録されたことは研究者にとつて有難いことである。

常に親しく指導いただいているために、批評というより紹介に終つたと思う。この書は今後の論文によつて塞きたい。

(弘文堂発行・四百円)

の宗派主義に墮するものが少なくない。殊にわれら国文学徒として必須欠くべからざる仏教の教説を科学的に体系的に論述した著作は一つもない現状である。

ところが、伊藤康安教授の近著『仏教の理論と展開』は、根本仏教から宗派仏教への理論的展開の必然性を究明するのを主題としたもので、現代仏教の緊急課題にこたえた学術的意図を十分もつた力作であるが、それとともにその著作の動機が、終戦直後進駐軍の若い将校で、シカゴ大学で東洋学を専攻していた学徒に仏教の講義をわか

りやすくするにあつたから、そしてこの著述はそのときのノートを整理・増補したものであるから、予備知識のない者にも難解難入の恐れなく、頗る平明で滋味深々たる叙述がなされている。特に著者が国文学の著宿であり、わが仏教文学における最高權威であり、五十嵐博士門下切つての名文家であるだけに、行文の流麗にして些の凝滞なきは勿論、經文の国訳、偈の七五調訳のたくみさは驚異すべきで、私はこの書を読みつつ、先師いますがごとき感にうたれることが屢々であつたのである。

さて、本書の内容は、まず、序章は「般若思想から弥陀信仰へ」と題するが、釈尊の正覺の内容を無我の理と因縁の法とに約し、結局皆空に帰すると述べ、これがすなわち摩訶般若、訳して大智だという。「その仏の大智慧を二つに分けると根本智と後得智となる。根本智は仏が正覺によつて得た大智そのもの、後得智は仏の正覺とともに生ずる大慈悲そのものである。」

「仏陀のことを自覺覺他覺行究満ともいう。根本智も後得智も仏陀の大智(摩訶般若)の両面と見るべきで、つまり悲智円満

が仏の本誓であり、本質である。」

——こう叙し来たって、伊藤教授は般若經典にいう真空を論じて、華嚴經に入り、真空即妙有と転じて、兩者相成して仏の正覺をなす所以のものを説かれる。更に仏の後得智——慈悲を大慈と大悲にわち、前者からは法華經、後者からは無量壽經が出た理路を明らかにされる。この伊藤教授の根本智と後得智の論は、夢窓国師の『夢中問答』の教禪一致説より遙かに精細で、わが国民の二大宗旨である法華信仰・弥陀信仰の由つて来たるところを理論的に明らかにし、甚だ独創的である。

この新しき観点に立つて、次に著者は、「仏教の展望」を試み、歴史的に原始仏教・小乗仏教・大乘仏教を叙述したり、大乘經典・論釈の主要なるものを解題し、次いで仏教東漸・訳經史から、三論・天台・法相・華嚴・真言の各宗派の興起と教理を述べ、ついで日本における伝來史を概述し、叡山仏教を主として円頓戒と念仏思想、末法思想、本地垂迹説、往生要集と恵心僧都など、王朝時代の仏教思想の推移を見事に浮き彫りし、更に鎌倉時代に入っ

て、法然・親鸞・一遍・日蓮らの教説を歴史的・理論的に解明し、転じて律宗の由来を説き、それが小乗戒から大乘戒へ、更に無戒の戒へ進んで、ついに唱名・唱題・坐禪と化したる次第をつぶさに述べられた。おわりに、教外別伝たる禪宗が日本二十四流禪に分派していても、もともと仏々祖々面授の法で、釈尊より嫡々相承して今日に到っているものであるから、禪宗において大切なものは共通な教理ではなく、個人的祖師の行履であり言行であるといつて、日本の代表的祖師の語と逸話を興味深く語つていられる。特に「七朝夢窓国師と五山禪」と「関山無相大師と正法禪」はそれぞれ別章に詳論してあり、二師の風采と思想が端的に精采ある筆致で描き出されている。

付録の(1)「造寺造像譯經転説写經修法等略年表」は、略の字があるに拘らず、甚だ精細で、本書のみならず、仏教史を読む者の必ず参考にするべき力作だが、印度・中国を省いて、日本だけのものが返す返す惜しい。これが略年表と称された所以かとも思うが。しかし、同じく(2)「法華經壽量品」

(自我偈・訳) (3)「法華經普門品」(觀音偈・訳)は甚だ名訳で、伊藤教授が単に詩偈文章の宗の人であるばかりでなく、故甲鳥園大人の風雅をも嫡伝された才藻を十分に發揮したものであり、恐らく恵心・親鸞らの和讃に比しても、決して劣らず、流麗のしらべは却つてまさるものがあると思う。両偈は長いから割愛してここに一例として、金剛經の「応無所住而生其心」(まさに住する所なくして其の心を生ずべし。)の訳の一節をあげてみよう。

月ころろなく そらに照り
花ころろなく 野にほふ
この月花の ころろこそ
おのがまことの ころろなれ

咲くとおもはで さくはなに
人はころろを なぐさめつ
照るとおもはで てる月に
人はころろを すますなれ

私は伊藤教授がこの麗筆をもって法華經八巻をはじめ、主要經典を国訳して、邪

宗・無宗教に転落している、わが末法の衆生に大慈大悲の法雨をさんさんと降りそそ

がれんことを切に仰望する者である。

(早大出版部・定価四五〇円)

大野実之助著『李太白研究』

岡 一 男

中国の詩は、唐に尽く。唐の詩は、李白を推して第一となす。李白は、実に中国第一の詩人也。——とは、私が少時愛読した大町桂月翁の「李白」論の起筆だが、李白が同時の後輩杜甫及び中唐の白楽天と伍して毫も遜色のない中国第一流の詩人であることは、天下の公論である。そのうち杜甫

については土岐善麿博士の近業『新訳杜甫詩選』三巻があり、その傑品を年代的に排列して美しくわが古歌の韻律に翻しつつ、苦惨の生涯と深刻な精神の懊悩を描いておられる。また堤留吉教授の一昨春の力作『白楽天』は、内外古今の学説を綜合してその生活と思想と文学を論述して、彼の世界文学史上重要な地位にあることを明らかにされたが、このたび大野実之助教授が恐らく李白研究史上空前の大著と思惟される『李太白研究』を公刊されて、その時代

と人物と作品を綿密に考証・評論し、千古を照らして彼の詩人的本質を闡明し、光燭万丈たらしめ、ここに前記の二高著と相俟つて東洋の三詩聖一時にわが早稲田学園に聚まるの壯觀をみせられたことは、はなはだ欣快にたえない。

李白・杜甫・白楽天の優劣は俄かにきめられないが、李白は初唐の詩壇に低迷していた六朝の習氣を一掃し、千載已絶の大雅を作し、後二者に先駆して唐詩を古今に卓絶せしめたるもの、幼にして天才、長じて天上謫仙人の称があつて、その神識の超遇と、天馬空を行くが如き奔放なる詩魂とは、到底人間のものではない。徳富蘇峯翁は『杜甫とミルトン』の大著を上梓して両者ともに世界的詩人として甲乙なきを論じ、白楽天は王朝以来わが国文学に深き影響をあたえ、また中国においては元輕白俗

のそしりを逆転して、近時社会詩人・人民的詩人として声価大いに揚つてゐるが、これをわが和歌史上でいえば、李白は柿本人麻呂、後二者は山上憶良・大伴家持に比すべく、天籟と地籟と人籟のちがいあるは、如何ともしがたい。桂月翁が、杜甫の登高して大水にあい、飢えて、漸く食をえて、食いすぎ、頓死したのと、李白の大醉して采石江に浮かんで、水中の月を捉えて死したのと、この二人の死に方を考えても、「杜は、どうしても、尋常の人也。李は、仙物也。」と評されたのを当れりとする。いわんや、白楽天は晩年香山寺に退休し、優游自適し、家族に温く看護されて天寿をおえたのだから、杜甫よりも尋常な幸福人といわねばならない。近人の貴重する兼濟・独善の思想の相剋の如きは李太白にむしろ凄絶なるもののあることは、大野教授の新たに究明したところである。

しかも、彼の生涯の変化に富む、幼にして神童、百家を觀、群經に通じ、長じて劍を好み、仕を求めて四方に遊歴し、顯官に謁して英才をあらわし、俠客と交わり、隱者と相棲み、壯にして長安に上り、玄宗に